



TITLE:

<批評・紹介>東亞古文化研究 原  
田淑人著

AUTHOR(S):

澄田, 正一

---

CITATION:

澄田, 正一. <批評・紹介>東亞古文化研究 原田淑人著. 東洋史研究  
1941, 6(2): 142-143

ISSUE DATE:

1941-04-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145731>

RIGHT:

る研究を前進させた所以である。

〔小畑 龍雄〕

## 東亞古文化研究

原田 淑人 著

昭和十五年十一月發行

本書は明治末年以來三十有餘年間に渉る著者の論文四十八篇の集録されたものである。今本書集録の諸論文を要約するならば、先づ著者の研究が正倉院御物による唐代文化の闡明に出發され更にそこに見られる東西兩文化の交流に思ひをいたされ、遂にはひろく考古學上より東西兩文化の關係にまで發展され、たことが本書の根幹をなしてゐると思ふ。而もこの根幹こそ實に著者の今日までに辿られし研究の發展過程そのものではあるまいか。東亞古文化の研究といふ困難なる分野に著者が獨自の方法もて開拓の歩を進められ、既に過云に於てその貴重なるアルバイトは數回の公刊を見てゐる。資料の不備によくうちかたれるべく著者のとられた方法は常に遺物のみでなくむしろ文獻に重點を置かれた。而もその文獻の涉獵驅使も常に遺物に對する深き理解もてなされたが、それはひいて著者獨自の學問體系を築かれた所以と思ふ。その著者の學問體系は古くは『支那唐代の服飾』或ひは近年の『漢六朝の服飾』に於て遺憾なく發揮されたのである。我々はこの兩書によつて充分著者の學問體系を知つたのであつたが今新たに本書を手にする時、更にさきに

述べた如き著者の辿られ且つ發展された研究過程を知ることが出来るのである。而もその研究過程の出發點が正倉院御物を通しての唐代文化の闡明であつたことにより、著者のとられた獨自の方法が目ら定まつたものではあるまいか。正に對稱的に又方法的に新しき分野開拓の運命をになはれた輝かしき出發であつたのである。かくて著者のとられた方法、それによる體系、體系化を裏づける研究過程を今我々は如實に知ることができよう。

次に本書中の一々の論文を紹介する煩を避けて大體を述べて見よう。先づ唐代ひいては我が天平時代の風俗を考察せられたものをのせるが、かゝる著者の欲求は自ら正倉院御物への注目となつたのである。而も唐代文化を反映せる御物のエキゾチックな感が實に波斯、東羅馬、印度等の西方要素に本づくことを檢出されるべく努力されたのが「正倉院御物を通して觀たる東西文化の交渉」の一論である。外來系の圖紋に就いては巴紋、漢代の騎射狩獵文が述べられる。古鏡關係のものとしては海獸葡萄鏡をはじめ唐鏡背文の西方意匠や寶飾、或ひは又古鏡の背紋と一般工藝圖紋との關係等が玻璃鏡の起源と共に含まれてゐる。次には古代の刀劍であり更に問題多き秦の金人、銅鼓が興味深く論ぜられてゐる。陶器、陶俑その他明器等を取扱つた諸論文中には從來不明なりし支那南北朝時代の土器を紹介された

ものが含まれてゐる。瓦甎、鸕尾、甕像石等に次いでガラス或ひは漢代の絹、簡札が取上げられる。樂浪の遺物を中心とした五篇の論文の中では殊に木棺或ひは杯が文獻と相俟つて考察されたのは注目すべきものである。而して「考古學上より見たる東古文化」の關係を概観されては、漢と大秦との文化交流をガラスと絹もて述べられ、唐と波斯サッサン朝との關係を胡瓶と獅子狩文様の例もて論じて居られる。最後は我が古墳出土品と支那六朝遺物との關係である。

以上が本書集録の諸論文の大體の紹介であるがその根幹は既に述べた如く唐代文化の闡明から正倉院御物への關心となりこゝに著者の支那考古學開拓の方法は定まり、而もその研究方向が遂に東西兩文化の交流關係に發展されたものであることを知ることが出來た。従つて本書集録の諸論文の諸事項に關して稍重複する所が多い。そのことは我々が特に本書にこそ卷末索引の必要を痛感する所以である。更に希望を述べらばその後の新しき資料或ひはそれに本づかれる最近の見解等を簡単に追記されたとの念一入である。

## 東洋史上の日本

志田 不動齋著

昭和十五年十二月、東京四海書房出版  
本文三三八頁、定價三三〇

われらが國史として學んだ日本の歴史を東洋史の立場から見

なほしてみることは、面白いといふのみでなく學問的に重要であるといふ提言をしばく耳にしたものは緒言によると著者志田教授の六年前からの課題であつた。日本を中心とせる大東亞の歴史的相互關係を具體的に内容づけその間を貫く一系の活力筋を見いだし將來の指導原理たらしめる」企ての成果たる本書「東洋史上の日本」を手にして、待望の好著をえたことを喜ぶであらう。現實に對するはげしい關心と共に、學徒としての眞摯な勇氣をこめられた本書には、東部アジア、即ち日本海・黃海支那海によつて、孤立させられたのではなく結びつけられたる日本はじめ朝鮮・滿洲・蒙古・支那、更に南方の地帯において興起せる諸民族及び諸國家の政治・經濟的交渉の歴史事情が相互の史料を對校し、既出論著に參據し、平明周密な筆致を以て詳述されてゐる。分つ所は序論の外十章、終りに結論、參考書目及び索引を附してある。

序論においては、東亞における先進國であつた支那の華夷思想を検討することにより外交關係に現れてくる推恩・朝貢・侵襲等の諸形式を指摘し、第一章古代の日支關係において支那的世界と接觸し始めた三韓・日本の狀態を説明される。この場合にも經濟史的觀點、殊に周末支那社會内部の發展を考へる如き態度は外交的事實の敘述に或る確かさを與へる様に見える。これは全編を通じて看取される所である。